様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月１９日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22530810

研究課題名（和文）実践的教育方法学としての戦前期教育心理学の領域固有性の確立過程

研究課題名（英文）　Study on Process when Psychology is Accepted as one Subject of the Normal School

研究代表者
坂西　友秀（BANZAI TOMOHIDE）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：30165063

研究成果の概要（和文）：師範学校における教科目の整備は、明治 8 年中學師範学科の設置後である。明治 10 年に、小学師範學科は 2 年半、中學師範学科は 3 年半とし、後者に初めて心理学が学科目として導入された（ 東京高等師範学校・東京文理科大学, 1931, p.17）。欧米を模して学年及び教育内容・教科目の編成が行われたことが推察できる。中學師範では、心理学は第 2 学年の前半期・第 4 級と第 3 学年前半期・第 3 級で開講された。小學師範科には心理學は学科目に含まれていない。さらに、明治 12 年 2 月に、心理学は本科第 3 年・5 年の下級で開講された 。

研究成果の概要（英文）：Maintenance of the subject in normal school was conducted after installation of the teacher of secondary school　training course in Meiji 8.(1885)　In Meiji 10 (1887),　the students who were belonging to the elementary school teacher training course required to study for two years, and tree years were necessary for the students in secondary teacher training course to graduate. Psychology was introduced into the latter course as academic subject for the first time（the Tokyo higher normal school and Tokyo Literature and　Science University of Tokyo, 1931, p.17）. It can guess that Japanese ministry of Education organized the normal school system, focusing on the grade, educational contents and the kinds of subject similar to the European Universities. In the secondary teacher training course, subject of psychology was lectured at the first half of the second grade, and in the first half of the 3rd grade,　But, Psychology was not contained in academic subjects at the course of the elementary school teacher training. Furthermore, in February of Meiji 12, Psychology was introduced to the curriculum of　main teacher training course. The third and 5th grade students were obligated to get credit of the Psychology.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,40,000	720,000	3,120,000

研究分野：教育史
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：教育心理学、師範学校、教科目、客観科学、領域固有性

１．研究開始当初の背景

今日、教育心理学は、教育科学、応用科学の一領域として独立している。教育心理学のこの領域固有性は、欧米から日本に心理学が輸入された当初からあったわけではない。心理学と学校教育の重要な接点の一つは、知能研究であった。心理学は激動する近代日本の社会的な要請を敏感に反映していた。緊張する近代の国際関係の中で、健康で優良な国民の育成は国策的課題であり、これは子どもの発達のあり様と教育の効果を客観的に究明することへの関心を強める重要な契機になった。日本国民・民族の知的能力の開発が、教育心理学研究の重要な研究領域になる必然性があったのである。五族協和を唱え東アジアの「共存共栄」を目ざす上で、多文化・多民族共生は、教育上重要な課題であった。従来、教育心理学の研究史の分析は、人物研究、方法論の研究等、それぞれの視点から試みられてきた（山下,1987,今田,1962, 佐藤,1997, 2002,心理科学研究会歴史部会, 1998）。教育制度・内容を具体的に規定する当時の教育令や教育課程との関わりから心理学・教育心理学の発展過程を分析した研究はほとんどないといってよい。

２．研究の目的

西欧から輸入された心理学が、実践的教育方法学として教育心理学固有の研究領域を確立していく過程を、東アジア諸国との多文化共生を視野に入れた日本の近代化の歴史・文化と国内及び東アジアにおける日本の学校・教育制度の普及・整備と関わらせて明らかにする。網羅的に研究論文・論考を質的に分析することで教育心理学研究を下位領域に分類・整理する。これらの研究を通じて、各領域ごとに、心理学黎明期の教育心理学研究の意義と果たした役割を明らかにする。さらに、心理学・教育心理学は、自然科学の方法論を応用することで価値独立的な客観科学・実証科学として存在基盤を確立してきたが、他方で社会の変化を敏感に反映し、社会科学的性格を強く有するものであることを、原著論文・論考の諸資料を分析することで実証する。

３．研究の方法

本研究は、上述の目的に照らして、大きく３つの部分に分けられる。第１部では、教育心理学が実践的教育方法学として固有の研究領域を形成していく過程を、学校教育の普及と関連づけて解明していく。具体的には、西洋から輸入された心理学と日本の学校教育との接点と関わりを解明する。また、心理学の教育課程への編入を教育令（樺太教育令・朝鮮教育令・台湾教育令・南洋諸島教育令、等）の発令との関連で明らかにする。ここでは、国内と国外のアジア諸国の場合に分けて分析することにする。第２部では、当時、子どもの社会的状況と教育・教育心理学上の問題、課題は、どのようなものがあったかを分析し整理する。第３部は、教育に関わらせて行われた教育心理学の研究論文、論考を資料に分析し、教育心理学研究に固有の下位領域を明らかにする。具体的には、日本心理学会大会で発表された論文、ならびに心理研究、心理学研究、教育心理研究、等に掲載された原著論文の内容を分析整理することで教育心理学研究の領域区分を試みる。

４．研究成果

１）師範学校と心理学　師範学校の設置を申請した理由に、次の5つの当面する問題（ 五弊） があげられている。一弊、教育法が不備であること。子どもが8歳、9歳あるいは12, 13歳になっても教育は義務化されていなく、親には子どもに教育を受けさせる意識がない。二弊、教育のない者は、物の道理がわからず身を持ち崩す者が多い。三弊、庶民が学ぶ場は寺子屋で、師匠は狭い知識教養しかない無頼者である（「大概流落無頼ノ禿人自ラ糊スル不能ルノモノニシテ素ヨリ教育何物タルヲ不辨其筆算師ト稱シ書讀師ト稱スルモ纔ニソノ一端ニ止ルノミ… 」）。四弊、教える規則が無く、多くの子弟を集めて、朝から晩まで声を出し騒々しくしているだけである（「聲音囂唯其囂然之ヲ以テ教學トス亦一般幼學所ノ風ナリ… 」）。五弊、希に学校が設置されていても、従来の風習を踏襲し「四書五経」を教えるか、無益なものを暗記させるだけだ（「タトヒ勉勵ヲシテヨク之ヲ暗誦ストモ其今日ニ用アル何ニ有ル… 」）。近代の知識・技術を広く系統立てて、子どもに教える能力を持つ教師を養成することが焦眉の課題だった。師範学校設立時の教科目は、綴字・習字・單語・會話・讀本・修身・文法・算術・養生・地學・理學・史學・幾何學・博物・科學・生理・墨畫、であった。「教育」や「心理」の表現は全く用いられていない。

まずは教科の教育に焦点をあてた教科目の編成に重点がおかれた。明治6年（ 1873年） 6月、師範学科は、餘科（ 初等・上等各6ヶ月）と本科（ 1年） に分けられ、餘科で小学校教

員に必要な学科を学び、卒業後本科に入り教授法を学んだ。餘科では、漢文以外には知らない者が多かったため「泰西から輸入した学科」を「普通學」として教えた。明治6年（ 1873年） 7月には、大阪と仙台に師範学校が設置され、それぞれ地名を冠することとなり、師範学校は「東京師範学校」に名称変更された。餘科は豫科に改称され、教科の整備が大きく進んだ。「年限及び級別の如きは前規定に異ならないが… 特に教科課程に関しては著しく整頓せられた觀があった。當時教育學・心理學等の教科を設けず専ら教授法に重きを置いた」（ 東京高等師範学校・東京文理科大学, 1931, p.12)。

教科目の一層の整備・充実は、明治８ 年8月の中學師範学科の設置以後である。１学年は9月から翌年7月までとし、欧米に近い。明治10年には、小学師範學科は2年半、中學師範学科は3年半とし、後者の中學師範学科に初めて心理学が学科目として導入された。「中學師範學科の教則は、その創設の際に定められたものにて、不備の點が少なくなかったから、大改正を施し、學科については新たに天文學・地質學・心理學を加へ、教科書は和漢の歴史の外は、すべて英語を用いしめ、且つこれを獨習し、唯教師について疑を質すのみに止めしめんことを期した」（ 東京高等師範学校・東京文理科大学, 1931, p.17)。欧米を模して学年及び教育内容・教科目の編成が行われたことが推察できる。中學師範は、3年半・7級（ 1年： 7級・6級, 2年： 5級・4級, 3年： 3級・2級, 1級） に編成され、心理学は第2学年の前半期・第4級と第3学年前半期・第3級で開講され、「ウェーランド」の「心理學書」が用いられた。小學師範科は2年半・5級で修了し、心理學は学科目に含まれていない。さらに、明治12年2月に豫科（ 2年）、高等豫科（ 2年）、本科（ 1年） の3科を設け、小学師範學科は豫科・本科を修了し（ 3年）、中學師範學科は豫科・高等豫科・本科を修了する（ 5 年） ことを要件とした。教育學はこの年学科目として独立した。心理学は本科第3年・5年の下級で開講され、毎週の教授時数5時間であった（ 教育学4時間： 全教授時数28時間） 。小學師範科も中學師範科も共に本科に進むことから、両科とも心理学が必修になっていた。

２）女子高等師範学校と心理学　師範教育における心理学の位置づけを、東京女子師範学校の歴史からも探ってみよう。前進は、昌平坂学問所を継承して、明治5年（ 1872年） の学制で湯島聖堂内に官立師範学校として設立された。1878年に官立師範学校が各府県に移管され、東京師範学校と共に東京女子師範学校となった。明治30年（ 1897年） の師範教育令で尋常師範学校は師範学校に改め、各道府県に1校設置された。高等小学校卒業を入学資格とする本科第一部と中学または高等女学校卒業を入学資格とする本科第二部が設置された。第一部の学科目に心理学はなかった。本科の学科目またはこれに関連する学科目についてさらに高等な学習をさせる目的で専攻科がおかれ、増課専修科目として心理学と倫理学が設けられていた。

教科目に心理学はなかったが、現在の心理学に当たる性理学が、中島力造によって教授されていた。同志社大学出身の中島は、米英に学び倫理学を日本に紹介した。彼は、哲学のpersonality やperson を日本語に翻訳するなど、後の心理学に通じる専門性を持っていた。高等女子師範學校になる前は、高等師範學校女子部（ 明治18年8月～ 同23年3月）であり、中島が修身科の授業を行っていた。明治29年5月18 日に皇后陛下行啓があり、女子部と付属學校園の授業を「ご覧遊あそばされた」。このとき中島は、第二学年に「心理大意」の授業を行っている。内容は不明だが、女子師範の校史に「心理」を冠した授業が記録された最初であろう。

明治30 年12 月から女子高等師範學校となり、文科（ 既設）・理科（ 既設）、技藝（ 新設） の３ 科から成った。当初、文科の学科目は、倫理・教育學・國語・漢文・外國語埼玉大学紀要　教育学部, 61(1) : 81-105 (2012)　－83－（ 英語）・歴史・地理・家事・體操・習字・圖畫であった。心理学は、「應用心理学」として教育學（ 他に教育史・論理学大意・教育ノ原理・教授法・保育法・管理法・教育法令・教育教授法・實地練習があった） に含まれていた。明治41年4月1日からは、奈良女子高等師範學校の新設に伴い、東京女子高等師範學校に改称した。大正5年10月23日の皇后陛下行啓の折に下田次郎が、家政科の生徒を対象に「心理學、判断の心理」を講義した。翌大正7年7月25日、卒業者第3 回講演会－「卒業者の為國語及び漢文の講演会」が開催され、國語の授業として垣内松三が「讀方の心理及び教授」と題した講義を行っている。さらに、大正8年3月には、「各科第四學年生に卒業前の特別修養を與える為科外講演を委嘱」し、久保良英が「教授効果の測定」を講話している。心理学は、授業科目になっていたが、教育活動に焦点を当てた一つの独立した「教育心理学」分野として確立されてはいなかった。

心理学の応用として、教育効果の測定や国

語教育の読み方指導に導入されていた様子がうかがえる。

小學師範・中學師範・高等師範がそろい、師範教育の体制はほぼ整った。師範学校は、富国強兵策が強化されるにつれ、「師範學校ハ皇國ノ道ニ則リテ國民學校教員ニ須要ナル教育ヲ施シ師表タルノ人物を錬成スルヲ以テ目的トス」（ 文部省, 1942）とし、「皇國ノ道」に則る「國民學校教員」の養成を担った。本科と豫科があり、心理学は、豫科の教科にはなく、本科の教育科（ 教育・心理・衛生）に含まれた。さらに、「師範學校本科ノ教科ヲ分チテ基本教科及選修教科」とし、基本教科（ 國民科・教育科・理數科・實業科（ 男）・家政科（ 女）・藝能科・體錬科・外國語科・教育實習）は必修で、選修教科はいずれか一教科を選修させた。

心理学が含まれる教育科の一週の授業時数（ 全体36時間） は、1 年生５ 時間、2 年生４ 時間、3 年生４ 時間であった。選修教科として教育科を選んだ生徒は、心理学を含む特修科の6時間が加わった。表1は、本科の教育心理科の授業内容である。

教育心理科の授業時数は第１ 学年 66 時間（ 週 2 時間）、第 2、第 3 学年各 33 時間（ 週 1 時間） であった。教授方針は四つ掲げられている。「一、精神生活ガ歴史的風土的ニ形成セラルル所以ヲ明ニシ國民ノ精神生活ノ特質ヲ會得セシメ國民的自覺ヲ深カラシムベシ一、兒童及青年ノ發達ノ情態ヲ究メテ教育トノ関係ヲ明ニシ教育實踐ニ於ケル方法的基礎タラシムベシ一、國民的性格ト其ノ錬成ニ關スル心理ヲ詳ニシ教育方法ニ對スル理會ヲ深メ教育者タルノ實質ヲ錬成スベシ一、心理研究の方法ヲ習得セシメ教育事象ヲ心理學的ニ正シク考察シ處理スルノ力ヲ育成スベシ」（ 文部省, 1942, p.58）。「教授上の注意」に心理學の特徴を見ることができる。「一、實生活ノ中ヨリ問題ヲ發展セシメ觀察・實験其ノ他生徒ノ經験ニ訴ヘテ事理ヲ明確ニ把握セシムベシ一、我國ニ於ケル獨自ノ研究業績ヲ尊重スルト共ニ我ガ國ノ歴史的文獻・文化・人物ノ傳記等ヲ資料トシテ活用シテ國民ノ心理的特質ヲ解明スルニ力ムベシ一、身體及精神ヲ分離シテ取扱フノ誤リニ陥ルコトナク常ニ心身ヲ一體トシテ考察セシメ兒童及青年ノ身體的精神的發達ノ具體相ヲ明ナラシムベシ… 」（ 文部省, 1 9 42 , p . 6 2）。

近代科学としての心理學の実証性を理解させること、教育上心身の発達を考慮することが、師範養成に当たって強く意識されていた。

３）心理学の教科への導入

(1) 日本国内の教育令、高等教育・師範教育における教育心理学の教科目の設置と位置づけに焦点を当て、高等師範、高等女子師範、旧帝国大学、及び私立大学の教育心理学導入の過程を分析した。文部省関係の動向の分析では、大正期から第二次世界大戦中の文部時報等の収集を行い、分析の準備を進めた。平成 22 年度は、韓国のソウル大学において京城大学ならびに京城師範大学に関する資料の発掘調査と収集を行う予定であったが、先方の都合等のため、中国・天津の南開大学での調査を行った。

(2)「子どもに関する社会問題・教育課題」に関する研究（第 1 部）に加え、「教育学・教育心理学の研究論文・論考」に関する研究（第 3 部）を行った。前者に関しては、文部時報、明治・大正期新聞記事等、後者に関しては、「教育学研究」、「教育科学」心理学研究」を中心に論文の分析を行った。論文・論考の分析は、坂西（2005 年、多賀出版）が行った論文内容の質的分析とカテゴリー整理法を用い、社会変化と教育心理学研究の推移を関連づけて進めた。

(3) 欧米の近代の学校制度にならって設置・整備された師範学校において、教育の「心理学」が教科として位置づけられ、教科目化されていく過程を、「教育学研究」に掲載された「心理学」論文・報告・資料を基に明らかにした。　師範学校における教科目の整備は、明治 8 年中學師範学科の設置後である。明治 10 年に、小学師範學科は 2 年半、中學師範学科は 3 年半とし、後者に初めて心理学が学科目として導入された（ 東京高等師範学校・東京文理科大学, 1931, p.17）。欧米を模して学年及び教育内容・教科目の編成が行われたことが推察できる。中學師範では、心理学は第 2 学年の前半期・第 4 級と第 3 学年前半期・第 3 級で開講された。小學師範科には心理學は学科目に含まれていない。さらに、明治 12 年 2 月に豫科（ 2 年）、高等豫科（ 2 年）、本科（ 1 年） の 3 科を設け、小学師範學科は豫科・本科を修了し（ 3 年）、中學師範學科は豫科・高等豫科・本科を修了する（ 5 年） ことを要件とし、心理学は本科第 3 年・5 年の下級で開講された 。小學師範科も中學師範科も共に本科に進むことから、両科とも心理学が必修になっていた。教授要目は明治 43 年に制定され、心理学に関しては大正 14 年、昭和 6 年、昭和 12 年に改正された。最後の改正では、心理学は、一部 3 年で週 2 時間の必修に、さらに 4 年に週 1 時間を加えて必修化された。教科書は、文部省の指定であったが、心理学の教科内容は十分とはいえなかった（依田, 1941）。学制は、3 年次に一般心理学を履修し、4 年次に教育・児童に関する心理学（幼児期の心理、児童期の心理、青年期の心理、職業指導の心理的基礎）を学んだ。

注意事項として、「心理学の教授に於ては、教育上の実際の応用に留意し且適宜実験・統

計・図表等によりて之を理解せしむべし、又、発達的方面の取り扱いに際しては日本人の特性を知らしむると共に異常児の心理に説及ぶべし」、としている。子どもの発達の過程を加味した具体的・実践的な内容が心理学に求められていた。

表１は、「教育学研究」に掲載された主だった心理学関係の論文・報告等である。児童の発達上の客観的な根拠や教育測定の方法論的な面から論じるものが多く、学校教育において心理学は、教育を「科学的」にする役割を期待されていたと推測できよう。「教育心理学」の名称はほとんど用いられていなく一般化していないが、その輪郭は形成されつつあったといえる。

それぞれ地名を冠することとなり、師範学校は「東京師範学校」に名称変更された。餘科は豫科に改称され、教科の整備が大きく進んだ。「年限及び級別の如きは前規定に異ならないが… 特に教科課程に関しては著しく整頓せられた觀があった。當時教育學・心理學等の教科を設けず専ら教授法に重きを置いた」（ 東京高等師範学校・東京文理科大学，1931，p. 12)。

教科目の一層の整備・充実は、明治８ 年８ 月の中學師範学科の設置以後である。１学年は9月から翌年7月までとし、欧米に近い。明治10年には、小学師範學科は2年半、中學師範学科は3年半とし、後者の中學師範学科に初めて心理学が学科目として導入された。「中學師範學科の教則は、その創設の際に定められたものにて、不備の點が少なくなかったから、大改正を施し、學科については新たに天文學・地質學・心理學を加へ、教科書は和漢の歴史の外は、すべて英語を用いしめ、且つこれを獨習し、唯教師について疑を質すのみに止めしめんことを期した」（ 東京高等師範学校・東京文理科大学，1931，p. 17)。欧米を模して学年及び教育内容・教科目の編成が行われたことが推察できる。中學師範は、3年半・7級（ 1年： 7級・6級，2年： 5級・4級，3年： 3級・2級，1級） に編成され、心理学は第2学年の前半期・第4級と第3学年前半期・第3級で開講され、「ウェーランド」の「心理學書」が用いられた。小學師範科は2年半・5級で修了し、心理學は学科目に含まれていない。さらに、明治12年2月に豫科（ 2年）、高等豫科（ 2年）、本科（ 1年） の3科を設け、小学師範學科は豫科・本科を修了し（ 3年）、中學師範學科は豫科・高等豫科・本科を修了する（ 5 年） ことを要件とした。教育學はこの年学科目として独立した。心理学は本科第3年・5年の下級で開講され、毎週の教授時数 5 時間であった（ 教育学 4 時間）。

表1 教育学研究に掲載された主な教育心理学関連論文及び報告

巻	号	論文タイトル	著者
1	9	賞罰に際しての心的事情	重松鷹泰
2	1	性格研究法としての臨界実験法並びに教育の方法の誘導について	小野島右左雄
2	2	非行少年の教育について	副島和穂
2	3	教育に於ける全体観と部分観	小川正通
2	4	米国に於ける教育科学の発達	小宮山 倭
2	10	教育的心理学の課題と現代に於ける位置	長坂端午
2	12	学習心理の私的概観	武政太郎
3	2	映画効果の実験的研究（その一）	稲井広吉・宇川勝美
3	9	精神的作業（努力及び過度の努力）に関する心理学的－教育学的考察	岩崎喜一
3	11	学習能と練習の関係	武政太郎
4	1	学習理論の問題－歴史的児童青年学への寄書	込田健夫
4	1	共同社会心理学と共同社会教育	安藤尭男
4	4	青少年発達の段階区分	遠藤泰助
4	11	智能による選抜と品性による選抜	濱田俊吉
5	2	教育の目標と内容と方法との関連について－方法論の立場から	佐伯正一
5	2	日本教育学会第十二回大会報告－一般報告（教育心理学発表数）	黒田博
5	2	日本教育学会第十二回大会報告－（四）教育心理部会の報告i	波多野完治
5	5	学習指導の過現未	佐藤熊治郎
5	9,10	精神発達の法則性	富田竹三郎
6	1,2	教育者の心理学	瀬沼吉太郎
6	2	学力検査の問題作成を巡る問題	田中正吾
6	6	教育者の心理学	瀬沼吉太郎
6	11	環境心理学の基礎	森 貫
6	12	教育者の心理学的訓練について	中子 勇
7	4,5,6	発達心理学とその対象としての発達概念について	武政太郎
7	6	性格	依田 新
7	10	教育と性格	安藤尭男
7	10	我が国に於ける教育考査方法の発展	乙竹岩三
8	7,8	心理学的教育学	佐藤千代吉
9	3,5	児童期精神教育の問題	溝上泰子
9	7	児童精神の発達段階	波多野完治
9	11	精神発達の法則性	富田竹三郎
10	3	純粋科学と応用化学（特に心理学について）	渡辺鈴市
10	5	発達過程の基本的標識と鍛錬の程度	寺澤巌男
10	6	性格研究の教育学的意義	後藤岩男
10	7	師範學校における心理學	依田新
10	12	国民学校の教育法	關 計夫

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① ▪坂西友秀　2012　師範学校における心理学の教科目化 :－師範学校と「皇國民教育」埼玉大学紀要. 教育学部　査読無　61（１），pp.81 – 105

〔学会発表〕（計 2 件）

①　坂西友秀・小谷野邦子　2012 年 11 月 23 日戦前期学校教育における心理学の位置づけ」日本教育心理学会第 54 回総会（琉球大学）

②坂西友秀・小谷野邦子　2011 年 9 月 18 日　「満州」における教員養成と教育規程日本社会心理学会 日本社会心理学会　第 52 回大会発表論文集　135　（大阪大学）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.edu.saitama-u.ac.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
坂西 友秀（BANZAI TOMOHIDE）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：30165063

(2)研究分担者
小谷野 邦子（KOYANO KUNIKO）
茨城キリスト教大学・文学部・教授
研究者番号：20162076

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：